

えて、振る舞うということにおいて、何かが表現され、伝えられてきたことを推察させる。本交流においては、それぞれの振る舞い、身体的表現を通じて出会うことに強い関心が持たれた。ここで言うところの身体的表現とは、長年の集団的修行、修道生活のなかで磨き上げられてくる宗教的人格の発露、具現化であり、宗教的熟成が個々の人格を形成し、その人格は、自ずと身体性において発露される、という受け止め方が双方にあったことを想起させる。そうした伝統のなかでの出会いの積み重ねが本交流であったとするならば、そこでは、宗教的人格を深め育むものが「靈性」と意識されていたということになる。宗教的人格を深め育むものは、本交流の枠のなかでは「修行」とか「修道」と呼ばれているから、「靈性交流」が継続される根底に、「修行」、「修道」の経験が存立していると言えよう。武藤氏は、修道士と禅僧が短時間の内に極めて親密になることを観察している(前掲論文八四頁)。このことは、教義理解が極めて困難である一方、修行、修道という共通項があることにおいて、双方ともに容易に理解しやすいものが存立していることを示している。

白山——『泰澄和尚伝』試論——

小林 一葵

『泰澄和尚伝』記載の紀年月日が何を意味し、そして登場する道照(道昭)、行基、玄舫(玄昉)の三大徳から白山修験道の何が推知できるのか、試論を述べたい。

『泰澄和尚伝』所載の元号のうち養老元年、神護景雲元年は

改元以前に新元号を使用している。これは『泰澄和尚伝』をして、成文化が後世のものだと暗に諭しているかもしれないものの、注視するほどの事ではない。もっとも養老の元号は白山修験道にすれば意味がある。それよりも問題にしなければならぬのが、『泰澄和尚伝』成立年とする天徳の元号と三月廿四日という日次である。将門の乱以降、比叡山は隆盛をきわめ、五代座主延昌治山の頃までに越前馬場下白山の平泉寺は天台末になっていた。この延昌治山中の天徳元年(九五七、『元亨釈書』越知山泰澄伝は同二年)に『泰澄和尚伝』成立と設定していることは偶然ではないだろう。というのも平安京遷都後、初の内裏焼亡が天徳四年九月二十三日で、天徳から応和への改元理由の一つが「天徳は火神号也」であった。「法性房の焼け扉」でも知れるが、火雷神が猛威をふるっていたのである。その天徳元年に『泰澄和尚伝』が成立したとするのは、雪の民俗信仰を原有する白山修験道の立場を象徴したものと考えられよう。要は火に対する雪の民俗信仰をもつ白山修験道を世に喧伝せしめるためであった。天徳の次元号である応和四年に勧学会も延暦寺で開始される。

三月廿四日という日次をみる。この応当日を探索すると『平家物語』にあるように平家が滅亡した月日である。だからといって『平家物語』成立以降に『泰澄和尚伝』が成立したのかというと、そうではない。平泉寺ではこの平家滅亡の記憶は忘れてならない出来事だったのであり、結論をいえば延暦寺末のもとで、雪の民俗信仰を表出する『泰澄和尚伝』は平家滅亡の文治元年以降、弘安五年までには成立していたことを明らかにしたい。

泰澄生誕日の六月十一日については、この六月の降雪こそ白山信仰の源泉である雪の民俗信仰と命名した根拠であるが、この応当日に最澄示寂一週間後に大乘戒壇設立の許可が下りた日がある。さらに泰澄没年は神護景雲元年(正しくは天平神護三年)三月十八日であるが、その神護景雲元年に最澄が誕生している。しかも泰澄没後ちょうど五か月後のことであった。十八日といえば勿論、観音の縁日であり、加えて柳田氏によれば三月十八日は普通の日でないといい、何かかくれた由縁がありそうに興味がつきない。

こういった歴史の中の応当日と関連づけることは、菅原道真命日と釈迦入滅二月十五日とを因縁連想づけている『松崎天神縁起』など、説話が制作されるときの手段方法なのであって、畢竟『泰澄和尚伝』は唱導説話縁起だったのである。

『泰澄和尚伝』に登場する道昭、行基、玄昉の大徳についてみたい。道昭と玄昉は法相宗を請来したことで夙に知られており、その道昭に師事したのが行基である。法相宗は法華経、最勝王経をも行持し、道昭、行基、玄昉いずれも法華経に精通していた。そして泰澄も受持法華者(法華経者)であった。玄昉は左遷されただけに唱導にとつては不具合にもかかわらず、『泰澄和尚伝』の中で一定の役割を果たしている。それは泰澄が生きた時代と重なることから、泰澄自身の実在、行実の真实性と白山修験道の奈良時代からの伝統を強調したものに他ならない。が、その背景には久安三年(一一四七)に園城寺と延暦寺とで惹起した確執があったに相違なからう。法相宗は兜率天の弥勒を経説するが、「一乗(法華経は)方便」(『沙石集』)と

いい、大乘戒壇設立に護命らが反対したことで明らかのように、結局のところ白山修験道の立場があり、「悉皆成仏」を説く法華経を所依の經典とする比叡山の興隆とともに、白山は延暦寺末となっていくのであらう。

『日本靈異記』における仏教について

前島 康佑

本発表は、『日本靈異記』における仏教をどう理解するかという点に関して、先行研究の理解を批判した上で、新たな理解を提示する、ということを目指した。

具体的には先行研究では、『日本靈異記』を、国家仏教に対する民衆仏教として捉えられている(吉田一彦氏『日本古代社会と仏教』など)。国家仏教と民衆仏教という二項対立の枠組みで、『日本靈異記』における仏教を捉えようというのである。しかしながら、こうした理解にはいくつかの問題点が存すると思われる。

第一に、国家仏教概念と民衆仏教概念の議論の水準がずれている、という点が挙げられる。国家仏教概念(国家仏教論)というものが、政策・政治的制度(「僧尼令」などに代表される)なのに対し、民衆仏教概念が信仰や活動内容などの水準に捉えられているのである。これでは、国家仏教と民衆仏教が対応関係にあるとは言えず、二項対立の枠組みとして捉えるのには不適切と考えられる。

第二に、『日本靈異記』における私度僧と官僧の問題である。吉田一彦氏や多田一臣氏などは、私度僧が活躍する説話が『日